

---

# 第一回大魔王選出選挙

弓式

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第一回大魔王選出選挙

### 【Nコード】

N8131Q

### 【作者名】

弓式

### 【あらすじ】

大魔王が勇者に討ち滅ぼされ、世界は平和に包まれた。しかしそんな平和も10年の時が経つと、様々な経済上の不具合が散見されるようになった。

それを見ていた大魔王の孫【ヴェト】は魔物も人間も幸せになれる国を作るために、王様に返り咲こうと思い始める。

折しも世界を統べる大勇王を決めるための、世界統一選挙が開始されようとした矢先のことであった。

ランブ商工会の妖精【リリル】、キコリのコロボツクル【ポツコル】

、麦畑を経営する暴れ牛鳥【アラちゃん】達と共に、対立候補の勇者達と繰り広げられる選挙戦。支持率を上げようとする両者。人々と魔物達の思いがぶつかりあい、選挙の熱風はエルフ圏を巻き込んでいく。

新感覚選挙ファンタジーここにはじまる。

## プロローグ【すべての戦いを終わらせるための戦い】

むかしむかしあるところに魔物達の住む【険しい山の国】と人間達の住む【広い平原の国】がありました。

この険しい山の国に住んでいた魔物達は、冬になるとたびたび人間達の住む広い平原の国に、食料を奪いにくるので、広い平原の国に住んでいた人々はほとほと困り果てていました。

そんなある時、広い平原の国に勇者様が産まれました。

そしてこう言ったのです。

「弱い人に悪さをするやつは許さない」

勇者様は悪い魔物達をやっつけようと奮い立ちます。

森の中で古代の魔法を研究していたという魔法使いと、海の上で巨竜と戦っていたという戦士をお供に連れて、使い古した剣と少しの魔法だけを頼りに、魔物達を統べる大魔王ヴェストゴギアがいる魔王山へと赴きました。

魔法使いは二つの魔法を合成する合体魔法を用い、戦士は魔物が使った技を一瞬で自分のものとする模倣剣術を用い、勇者はその勇氣だけを用いて、果敢に大魔王と戦います。

それでも大魔王の力は強大で3人は倒れてしまいます。

しかし、勇者は広い平原の国の人たちから託された思いを胸に、最後の力を振り絞って立ち上がり、魔王を頭からまつぶたつに切り伏して絶命させることに成功しました。

人はこの戦いを、【すべての戦いを終わらせるための戦い】と呼び、それから魔物達は人間達を恐れ、魔物と人間が戦うことは無くなりましたとさ。

めでたしめでたし

ではありません。

じゃあこの後、魔物達はどうなったのでしょうか。

実は魔物達が広い平原の国を襲っていたのは、山に住んでいたからなのです。山は平原に比べて、傾斜地が多く耕せる農地が多くありません。魔物達は冬に慢性的な食料不足に陥るために、仕方なく広い平原の国から食料を奪うことで補っていたのです。

魔物達も不本意なこととはいえ、生きるために仕方なくやっていたのです。

そして戦いが禁止されてからは悲惨でした。

すべての戦いを終わらせるための戦いの翌年は、松の皮をしゃぶり、仲間達の死骸を食べてなんとか生き延びたそうです。それでも食糧難は解決できず、冬の山には魔物達の死骸が白米にかけられたふりかけのようにぽつぽつと置き去りにされていました。

だからといって食料を奪うために戦いたくはありません。

だって魔物達は人間が怖くて怖くてしょうがなかったんですから。ですから、広い平原の国の人たちから食料を買うことにしました。その代わりに自分たちは険しい山の国だけで流通していた毛織物や木材を広い平原の人たちに送るのです。

何故最初からそうしなかったのでしょうか……不思議です。

人間と魔物がそうして交流を持つようになると小さなことでいざこざが発生し、ときおり暴力をともなった争いに発展するようにな

りました。

そして魔物と人間は、多数決で王様を決めて、その人に法律を作ってもらい、政策をとりまとめ、争いを仲裁してもらうことを次第に思いつきました。

そう、それはつまり【民主主義】

大魔王が殺されてから10年後、第一回全世界統一選挙が行われることになりました。

これはそんな、人間と魔物の戦いが全て終わったあとのお話。

## ヴェトとポツコル

険しい山の国西部、広い平原の国との国境に葦の生えた沼沢地があった。

戦後まもなく貿易を始めた両者は、この両国の中間地点に人間と魔物が休む宿場町を建設しはじめた。

初めそれは困難を極めた。

元が湿地帯であつたため、地盤沈下が絶えず、増水による被害が後を堪えなかつたからだ。

だが魔物達が道路を敷設し、人間達が重機を持って堤防を作り、その町はじょじょに形を為していく。

そして現在、固い大理石で作られた放射線状の道路、電気で動く開閉式の堤防が築かれ、そこは東西の文明が交じりあつた不思議な雰囲気のある町になっていた。

そんな人々の喧噪が絶え間ない町、そこから少し離れた堤防の上で、ヴェトという少年が頼杖について釣りをしていた。

町の川は生活用水で酷く濁り、底が全く見えない。

腐った卵のような匂いもするほどである。

一見すると魚などいないような気がするが、一体どういうことだろうか。

このヴェトという少年、元々靴磨きで生活を営んでいたのだが、1週間ほど前から働いても働いても黒パン一個という酷い稼ぎだったので馬鹿馬鹿しくなってやめてしまったのだ。

そんなわけでヴェトは結局ろくに稼ぎにならない靴磨きをするのはもう諦めて、市場に落ちていた木と糸と釘を使い簡単な釣り竿を作つて釣りをしはじめたのである。

ヴェトはかつたるそうにふぁあと欠伸をしていた。

おてんと様が空から落ち始め、そろそろやめようかどうしようかヴェトが逡巡しはじめたころ、釣り竿がびくっぴくっとな反応した。

ヴェトはおつという顔をしたあと、満面の笑みを浮かべる。

なんだ魚がいるじゃないかと思い、釣り竿を引いた。

しかし釣れたものを見て、苦笑い。

なんと今度開催される選挙のポスターだったのだ。

「ちっ……楽しんでようとしてもだめか……」

ヴェトはシラミだらけの髪をかきむしったあと、椅子代わりにしていた木の箱から降りる。

石畳の地面に寝そべって、ピクピク妙に細長い耳を揺らしながら、何か稼ぎのネタでも無いかそのポスターに目を通した。

太陽の光に照らされて裏面まで透き通ったその紙には、勇者が腕組みをした絵が描かれてあった。

『世界統一選挙開催だ。立候補は誰でも自由。俺に勝てると思うやつは出てきてみる』

などと綺麗な活字で挑発的な文章が下部に書いてある。

「勇者に選挙で勝てる奴がどこにいるんだか」

大魔王を倒した勇者の人気はそれはすごい物であった。

王様から息子になってくれと頼まれたとか、金銀財宝を村人から寄付されたとか、果てはどこかの国のお姫様に求婚されたとか、人気のエピソードを挙げればきりが無い。

もう10年も前の話であったが、大魔王を倒した勇者の話は人々の記憶にしっかりと刻まれている。

勇者に選挙で勝てる者がどこにいるのか。

とヴェトは起きあがり、釣り具の片づけをしながら考えていた。

そして道具一式を風呂敷に包んで立ち上がったとき、ある者の顔が頭の中に去来した。

俺の祖父、大魔王ヴェストゴギアだ。

ある意味知名度だけでは勇者に勝っているといえる。

人気は全くないだろうが。

床につくほどの髭を垂らし、肘を立てて枕にしながら、ベッドに寝そべる祖父の姿を思い出した。

物心ついた時にはすでに祖父は隠居に近い状態であったものの、出来ない父の代わりに度々政務を執ることも多かった。特に13年前に起きた魔王山の噴火の際には魔王である父よりも早く現地に赴き陣頭指揮を取ったという。

ヴェトはその時、8人いる皇子のうちの末弟であったが、たぶん皇子の中で一番祖父という時間が長かったに違いない。ヴェトは祖父の部屋にあった本をよく読む癖があり、よく祖父の部屋に入り浸っていた。

祖父としても皇位継承権の無い末弟であるが故に気軽に親密になれたのだろう。

ヴェトは祖父になでられた頭を手で擦って昔のことを思い出していた。

しかし腹の音になり、すぐに現実に戻ってきてしまう。

そう、魔王山が墮ち、帝政は滅んだことをその腹の音は痛感させる。

ヴェトは軽く肩をすくめると、あとで夜のたき火の火種にでもしようとその紙をポケットに入れる。

そしていつものようにお昼のお弁当を食べさせてもらうためにリルルのいるランプ商工会へ行こうと思った。

リルルとは1ヶ月ほど前、店の軒先で穴だらけのマントを被って寝ていたら、邪魔だと箒で頭お叩かれたのが最初の出会いだ。

その時の彼女はあまりに酷い境遇のヴェトに同情して、ちゃんとした仕事ができるまでお弁当を恵んでくれると約束してくれたのだ。それが今でも続いているというわけだ。

「今日も飯を恵んでもらいますか」

そうして、軽くおどけて片手をポケットに入れながら、もう一方の手で風呂敷を肩にかける。

もう大魔王は死んじまったんだ。

俺はただのそこらにいるコジキなのさ。  
プライドなんて犬にでも食わしちまえ。

そうして、市場へ続く階段をだるそうに背中を曲げながらとぼとぼと降りていった。

階段を降りると中央の商店街へとついた。

がっちりした煉瓦で作られた食品店には野菜や果物が店頭に並べられ、生魚がガラス製の蓋のついた大きな箱の中に入れられていた。大きな箱は上から覗いてみると真っ白い雪が壁面にこびりついている。

これは食べ物や箱の中で冷やす機械だ。

なんでも空気の収縮によって箱の中を冷やせるらしい。

魔王圏の魔物は一般的に野蛮でこういった西の科学文明のことは無知であると言われているが、それは大きな誤解だ。

魔王山に住んでいる者は案外こういう人間圏で作られた科学というものをよく知っているのだ。

何せ鎖国していた時代に、西からの輸入品の中で一番多かったのはこういった本であったからだ。

知識欲はある意味西よりは旺盛であったといえる。

しかし本ばかりでは実際を知っているとは言い難い。

そこで祖父は昔、この冷やす箱をお忍びで人間圏から買ってきたことがあった。

その時は【電気】が必要なことを知らなかったため、いつまで経っても冷えないこの箱を、祖父は不思議な顔をしながら杖でそこら中叩いていた。

ヴェトは人間圏に祖父がお忍びで行くたびに祖父の嫌いなものが増えていったなど、鼻の下を擦りながら笑っていた。

そんなふうに、昔のことを思い出しながら、商店を1つ1つ見ていると、ふと知り合いがゴザを敷いて店を出しているのを見かけた。シュギという木材をその場で椅子に加工しているポツコルであった。

ポツコルは身の丈を超えるような斧を手に持ち、イノシシに乗っ

て野山をかけめぐるコロボツクルである。

このコロボツクルは本来なら大地の精霊達を守るため、シュギの林の中で動物たちと一生を過ごすといわれる小さな妖精なのだが、月に一度こうしてシュギの木材をかかえて山里にでかけることがある。

シュギの林の中にはやたらとすり減る斧の原材料の鉄は産出しなし、狩りで取った獲物を保存する塩などの保存料もないため、山里で木材を加工した家具などを売ってそれらを買付けが必要があるのだ。

「ヴェトこんちわなのだ」

ヴェトに気づいたポツコルは木くずにまみれた小さな手をぶんぶん振る。

このコロボツクルは素朴で純真な性格だと言われている。そのなかでもポツコルは子供みtainな容姿もあいまって本当に無垢な心をもっていた。

昔こんなことがあった。

その時はリルルに会う前で、何の目的も無いまま生きるために靴磨きの仕事をしていた時だった。

ヴェトはいつものようにげっそりとやつれた顔でどこか休むところは無いか探し回っていたところ、ポツコルに腕に抱きつかれて『遊ぼう』と言われたのだ。

ポツコルとはそれで3回目の出会いだったのだが、ヴェトはなんでも俺みたいな貧乏人に話しかけてくれるんだと聞いたら、ポツコルに怒りながら説教されてしまった。

『万物はみな大地から生まれでたときから平等だって大地の精霊達が言っていたのだ。貧しい人もお金持ちもみんな同じなのだ。なんでそんなこと言うのだ！』

その言葉にヴェトは感動した。

それからヴェトは、仕事帰りにポツコルがいたときは必ず声をかけるようにしていた。

ヴェトにとってポツコルは唯一の友達だった。

「売り上げはどう？」

何の気無しに言った言葉にポツコルはひまわりのような笑顔でこ  
ういった。

「悪いのだ」

ヴェトは苦笑してしまう。

ポツコルは今日がダメでも明日ならなんとかなるとでもいうよう  
に、脳天気な笑顔をヴェトに向けていた。

「何が原因なんだ？」

「さあ？ わかんないのだ！ わかんないから困ってるのだ！」

片手で斧を振ってガツコンガツコン椅子作りにポツコルは励む。

みるみるうちに一本のシユギの木が、長方体に加工され、長方体  
は組み木の要領でくつついていく。事前に作ってあった背の飾り部  
分を取り付けて、細部に細やかなヤドリギの彫刻が掘られた見事な  
椅子が完成した。

リルルが作業場にこのポツコルの椅子を使っているが3年使って  
もきしみひとつしなないと非常に喜んでおり、見た目がすばらしいだ  
けでなく耐久性も抜群である。

しかしそれでも売れないとは、不思議なものだ。

「たぶん、努力が足りないのだ！ 大地の精霊様は努力をしたもの  
には必ず対価を与えてくださるのだ！」

そういつて額に汗を垂らして仕事をする。

よくみれば斧を振るう手の指にはタコができている。そのうえ毎  
日毎日こんな重い木材を肩にしょって運んでいるのだ。その労力と  
苦労は自分には考えが及ばないほどつらいものだろう。

ヴェトはこれだけやってるのに売れない原因は何だろうと、額に  
手を当てて考えこむ。

ふと隣にあるものを見て、かぱっと口が開いたままふさがらなく  
なってしまった。

なんと隣でもゴザを敷いて家具を売っていたのだ。それもポツコ

ルの家具の1/10の値段である。

人間が腕組をしてそれはそれは嫌な三日月のような目でポッコルを笑っていた。

ヴェトは急いで作業中のポッコルの肩を叩く。

「おい、ポッコル、隣みる隣、お前んとこよりはるかに安い値段で家具を売ってるぞ」

ポッコルはきょとんとしてヴェトの問いかけにまんまるな目を向ける。

そしてヴェトが指さした先をその目は見た。

「あ、あ~~~~~！ き、気づかなかつたのだ~~~~~」

ポッコルは腕をばたばた振ってその驚き具合を体の動きで示す。その様子を見た人間は口元に手を当ててぷぷぷとこらえ笑いをしていた。

脳天気すぎるのも問題だ、と改めてこの魔物の商売能力の無さに頭を抱えてしまう。

「や、やばいのだ。こっちも1/10の値段にしないと！」

ポッコルは椅子の前に置かれていた銀貨を1/10まで減らす。

魔王圏の【識字率】は20パーセントほど、ほとんど文字が読めないため人間のように立て看板を作って商品の名前と値段を並列するといったことはできない。

だからこうして、見本の前に支払われるべき銀貨を置いて、商品の値段を表している。

「それで採算がとれるのか？ あつちは人間が作っているんだから工場で作ったものだろ？」

大量生産品と手作り品じゃ1品あたりに掛かるお金の量や時間の量は天と地ほども違う。大量生産をする場合、非常に効率が良くなるため、びっくりするような値段で作っても採算が取れるのだ。ポッコルはあつと驚いた顔をする。

「1/10じゃ冬を越せないのだ……斧も塩もコロボツクルのみんなの分を買えないのだ……」

故郷に残してきた仲間達の思いがこの椅子には籠もっているのだろ。ポツコルが故郷のために椅子の路上販売をして、この冬を越えるだけの稼ぎを得る。

ポツコルの小さな背中には何十人ものコロボツクル達の生活がかかっていた。

「ど、どうすればいいのだ！」

ポツコルがヴェトの襟を掴んで、涙で濡れた顔をこちらに近づける。

「う、うん……」

ヴェトは良い案が思い浮かばず、困ったような顔をしてしまう。

ポツコルが嗚咽をあげて泣き出してしまいそうになったとき、隣のほうから声が聞こえてきた。

「お隣さんも木を電気の力で斬る機械を買って、その林の中の皆さんで協力して工場を建てればいいんじゃないですかあ？　そうすれば1/10の値段でも採算がとれますよあ？」

ポツコルはその言葉を聞くと、この世の地獄を見たというような泣き顔から、ひまわりのような笑顔へと瞬時に顔色を変えて隣の人間の方へ振り向いた。

「お、おじさんありがとうなのだ！　そうするのだ〜！」

人間はポツコルの反応に驚いたのか、口端をひきつつて肩をすくめた。

人間はからかったのだ。

電気の力で斬る機械も椅子を作る工場もたくさんのお金がいる。

お金が貯まるまで待っていたら、コロボツクル達はみな飢えて死んでしまうだろう。

「良かったのだ〜じゃあこの椅子は1/10の値段で売なのだ。この冬はちよつと我慢するのだ。そして来年からは工場を建てていっぱいいっぱい稼ぐのだ〜」

しかしヴェトはうきうきと踊るように仕事を再開させたポツコルに、その真実を伝えることはできなかった。

たぶんポツコルも少し時間が経てば誰かにこの事実を指摘されて気づくだろう。

ヴェトは心の中でそれは私で無くてもいいと思った。

ポツコルを泣かせるのは私で無くていいと思ったのだ。

そんな情けない自分自身をヴェトは心の中で罵り、唇を噛んでいた。

気づくと心配そうな顔でポツコルがヴェトの顔をのぞき込んでいた。

「大丈夫なのだ？　口から血を出してるのだ」

ヴェトは自分自身にたいする憤りで、唇をかみ切ってしまったていたようだった。

「なんでもない。さっき食べたトマトが口から出ただけだ」

自分でも驚くほど酷い言い訳だったが、ポツコルはなぐんだと頭の後ろに手をかけてきやつきやつ笑う。

「ヴェトは食いしん坊なのだ」

すぐに唇の血を手でぬぐうと、ヴェトはごまかすように笑ってポツコルの頭をなでた。

ポツコルは気持ちよさそうに目を瞑ってにんまりと両方の口端を上げた。

「じゃあな。俺はこれからリルルのところに行くから」

「ばいばいなのだ」

憎き魔物をやりくるめて上機嫌に客の相手をする人間の横を通り抜け、ヴェトは背を丸めるとぼとぼとポケットに手を入れながら、人と魔物が入り交じるとこまでも伸びるかのように長い長い市場の道を歩き出していった。

## リルルの工場

ランプ商工会は町の西側の端にある。これはどの都市ではどこも同じなのだが、町の郊外に住む人間というのは低所得者であることが多い、ここもそのご多分に漏れず、人間が作った安普請の煉瓦アパートがひしめきあっている。

人間が作ったと言ってもそこに人間が住んでいるのではない。

ここに住むものはほとんどが魔物である。

それには識字率が関与している。多くの場合文字が読めない魔物達は基本的に肉体労働でしか稼げない。そのため、どうしても低賃金になってしまうのだ。

また学校を出たとしても、そう職があるわけではない。人間の方でもついこの前まで【金融危機】があったらしく、雇い先が無い状態にある。

人間の方もこの金融危機が何故起こったのかわかっておらず、対応策が取れない状態にあった。

ヴェトは歩きながらへと笑った。

ヴェトは金融危機の原因を知っていたからだ。

全ては人間達の自業自得だということを。

そして、人間は魔物を地獄の釜に入れることによって、その金融危機という飢えを解消しようとしていることも。

ランプ商工会の横には、スライムナイトが死んだ目をしょぼんと落ち込ませていた。本来なら気高き護衛役であるはずの彼を横目に見ながら、ランプ商工会の木戸を叩いた。

「あゝ今忙しいから適当に入って」

ヴェトはリルルの言葉に甘えて、木戸を手で押して中に入ると、そこは絶賛フル回転中であつた。

雑多な魔物達が机に向かって、ランプ作りに熱を上げている。

机の右側から順に鉄の取っ手、ランプの底部、防熱ガラスが重ねて積み上げられ、魔物達はそれを手にとっててきぱきとくみ上げている。

机は円形をなして配置されている。それは中央部にある工作機械が原因だろう。

この工場には、工作機械が1つしかない。

精製された器具を効率的に配し、くみ上げるには、その工作機械から皆等距離でなければならぬのだ。

仮に一番奥の方に工作機械を配置し、普通の教室のように2列に机を配置したとしたら、人の行き来が邪魔になって工作機械に列をなしてしまうだろう。

そしてこの工作機械はいわゆる【蒸気機関】といわれるものを動力にしている。

この蒸気機関というのは便利なのだがくせもので、息もできなくなるほどの黒煙をそこら中にまき散らす代物である。

電気でうごく物はこういった黒煙を吹かない。ただ、あまりにも高価で魔物の手に届くものではないのだ。

ただ工場内に黒煙はない。工作機械の上に煙突を取り付けて、もくもくと石炭を燃やした煙は外に排出しているのだ。

そしてこの工作機械は何をするのかというと、いわゆる”穴開け”だ。尖った部分は螺旋状になっており、金属に先が入り込むと、金属を巻きつけて穴を開けるのだ。

動かないよう両脇をハンドルでぎゅうぎゅうに固定された鉄の棒に、魔物達は尖った部分を当てる。そして魔物がその尖った部分を引くとぽっかりと歪み1つ無いきれいな穴が開くのだ。

人力で穴開けを行っていた時代はこれに10分。この機械を使えばほんの数秒で穴を開けることができる。

人間が作った機械だが、よくできていると毎度のことながら感心する。

その分、値を張るのが玉に瑕だが。

さて、そんなせわしなく動く工場の中で、リルルはというと、割烹着の背中から出ている羽をパタパタ動かして、蒸し暑い工場内を冷やししながら、皆と一緒にランプを作っていた。

ヴェトはリルルの後ろに立って声をかけた。

「よく俺だとわかったな」

「こんな忙しい時間に来るのはあんたみたいな暇人しかないわよ」リルルはこつちを向かず、黙々と作業に打ち込んでいる。ガラス部分に取っ手を取り付けるためのねじ穴を、くるとハンドルを回しながら開けている。穴はおそらく部屋の真ん中にある機械で開けたのだらう。

ヴェトは一生懸命仕事をしているリルルの顔をのぞき込んだ。

目の前に顔が来てもリルルは無視。

ヴェトは笑いながらぶにとリルルの頬を人差し指で突いた。

「無視すんなよ」

とヴェトが言った瞬間、背中 of 羽がキンと固くなった。

「ニードルウィンド」

その魔法の言葉とともに羽が羽ばたき、ヴェトの体はトゲのような風によって鉄棒が入っている棚に吹き飛ばした。

カラララという音とともに鉄棒の山がヴェトに降ってきた。

「うおおおおおおおおお潰れるうううううううううううううううう」

頭から鉄棒の山に埋もれるヴェト。

数秒すると、ヴェトが頬をぴくぴくしながら鉄棒の山から顔を出した。

「ひ、ひどいじゃん!」

その声を聞いたリルルは、顔を上げ、ヴェトの方を向くと、クワツと鬼のような表情を向けて、ヴェトを罵倒した。

「作業中に触るんじゃないわよ! 不良品ができちゃうでしょ!

弁当はそこに置いてあるから! あんたみたいな怠け者はとっとと食べて出てきなさいよ!」

リルルは銀色の長い髪を赤い頭巾の中に束ね、長時間の作業で充血した大きい目を向けてそんなこと言った。

工場内の魔物達がびっくりにしたような目を俺たちに向ける。

ヴェトは苦笑いしながら、鉄棒の中からはい出ると、リルルの事務机から風呂敷に包まれた弁当を取って部屋の隅っこに三角座りした。

そして蓋を開けると光り輝くような弁当の中身が現れた。

まず小麦を蒸して、中に鶏肉を詰めたものがある。豆を発酵させ、塩で漬け込んでできた汁に、これをつけて食べるのである。また米と言われる手間はかかるが栄養豊富な南方の穀物に卵と海苔を盛っている。

味が薄いがまあまあいける。

野菜も凝っている。ニンジンを切って暴れ牛鳥のアラちゃんの顔を作っていたし、ドレッシングもごまをあえたもので香ばしい香りが匂い立っている。

（いつも思うが手間がかかっているな）

ヴェトはおお……と手を震わせた後、3回床に頭をたたき付けて、泣きそうな声でありがてえありがてえと言い、木のスプーンで一氣に飯をかき込んだ。

「なにやっ  
てんのよ」

リルルは作業しながら呆れた顔を向けていた。

「ひもじい農民」

「バツツツツツツカじゃないの」

「バカじゃないよ」

「ああもうどうでもいいわ。ちゃんと噛んで食べなさいよ」  
リルルはふんと言って、小声でこう言っていた。

（せっかく朝から丹精こめて作ったんだからちゃんと味わって食べなさいよね）

ヴェトの長い耳がぴくつとその言葉に反応した。

ヴェトの耳はかなり良い。1 km 先でさえずる小鳥の声が聞こえ

るほどである。

ヴェトはにやつと笑うとリルルをからかおうと思った。

「こんなに毎日おいしいお弁当を作れるなんて、良いお嫁さんになるなリルルは」

「なっ……べ、別にあんたのために作ってあげてるんじゃないからねっ これは残り物なのっ」

これを残り物というにはあまりにも無理があるだろうと、アラच्याんの顔をしたニンジンを口に頬張りながらヴェトは思った。

「もぐもぐ……ま、俺が出世したらリルルに恩返しするからな」

その言葉を聞くと、リルルは片目を半分瞑って眉をしかめた。

「はあ？ お礼って……私はあんたが好……ちがつ……ひ、ひもじそうですごく憐れだから同情してお弁当を恵んであげてるのよ。恩返しなんて当てにしてないわよ！」

「俺は世界を救う男になるから、その時まで待つてくれや」

その答えは予想していなかったのだろう。

リルルは数瞬固まったあと、間があってから口を開いた。

「……まっとうに職にもつけない男が？」

「本当だっつーの」

リルルはその答えに肩をすくめる。

「はいはい」

リルルはもう相手をして無駄だというようにランプを作る作業にもう一度取りかかった。

ヴェトは納得がいかなかったのか、ジト目でリルルを見返したが、リルルはヴェトを全く相手にせず黙々と作業を続けている。

ヴェトはふんと鼻で息をすると、口につっこんでいた箸を手にとって食事の続きを始めていた。

ヴェトは思った。

（リルルも俺を靴磨きだと馬鹿にしてる連中と変わらないんだな）と。

チリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

その時、お昼休み休憩のベルが工場内に鳴り響いた。

魔物達は思い思いに背伸びしたり、首を回したりしながら起きあがり、そろそろと昼食を食べに外に出て行った。

リルルはというと、まだランプを作っている。

「おい、ベル鳴ったぞ」

「バーカ、ここの工場長なんだから最後まで仕事しないといけないの。そうじゃなきゃみんな真面目にやらないでしょ」

リルルは机に向かって一心不乱に作業を続けていた。

ヴェトは大変だなと思った。

毎日油まみれになりながら、みんなのために色々な交渉をしたり、率先して仕事したり、とても水辺の上で飛び回る妖精とは思えない。10年前だったらもつとリルルも気楽な生活をできたのかもしれないと思い、少し胸が痛くなった。

ヴェトはまたリルルの後ろに立った。

「なに？ また邪魔する気？」

「仕事終わったか？」

「え、もうちょっと……うん。これで終わり」

ヴェトはリルルの肩に手を置いた。

そしてぐにぐにと力を加えて揉みしだいた。

「へ？」

リルルは驚いて後ろを振り返る。

「疲れてるだろ。めちゃくちゃ凝ってるぞ」

「う……うん」

「じゃあ続けるぞ」

リルルは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「あ、あの……もう少しで来客が来るの、だからこういう恥ずかしいことは……」

「いいじゃないか。別にお礼だよお礼。あつ俺が世界救ったらもつとすげえお礼してやるからな」

「……………バカッ」

しばし、気まずい無言が続く、何か話題が無いかとヴェトは頭に思いついた言葉をそのまま言ってしまった。

「そーいや、あくせく働いてるけど、工場の売り上げどうなんだ」

「あんまりよくないわね……」

「そ、そうなのか……」

言ってしまったからヴェトは後悔して暗い顔になる。

「やっぱり人間圏のランプには価格でかなわないのよ。魔物ってほとんど文字が読めないから、作業効率が悪いの。図面も読めないからいちいち私が教えなきゃいけないし……だからあんまり出来がよくないのよね。最近は西との貿易が活性化して、人間圏の上質で安価なランプが大量に流入してきて、全然売れなくなつて……」

「でも、ほら、リルルはガラス細工に工夫をしているとか言ってたじゃないか。それで高級路線に行けば」

「高級路線なんて、買うのはほんの一部だけよ。それじゃ売り上げには繋がらないのよ。みんな安い物買っちゃうのよね。まあ、ていうかね。そもそも出来の方も西には勝てないつてのもあるしね……」

はあっとリルルは大きなため息をついた。

「はつきりいつて、今度契約の不履行があつたら、うちは破産するかもしれない」

「そんな……」

ヴェトが驚いた表情を見せると、リルルの羽がピシッと力強く羽ばたいた。

「大丈夫よ。私がなんとかしてみせる。みんなを昔みたいにするわけにはいかないわ」

リルルははっはっはっとして腰に手を当てて笑う。

昔というのはあの戦後の大飢饉のことだろう。

あときはそれは酷かった。俺もあるときばかりは死にかけた。

俺はなんとか親切な人に拾われて生き延びることができたが、残った兄達は全てその時に病死してしまった。

リルルはひとしきり笑った後、ふうとため息をついて机に頼杖を

ついた。

「でもなんなんだろう、最近どんどん便利になっているのに、魔物達は元気が無いわ。どうしてなんでしょうね……」

ヴェトは昔祖父に教わったことを思い出した。

それは【経済学】の本を読んでいた時のことだったか、その本に祖父のやっていた鎖国政策を非難するような記述があったのを見つけたのだ。

小さいヴェトは不思議な顔をして頭に重い本を載せながら祖父の部屋に入っていた。

祖父は机で何か仕事をしているようだった。

おそらくその時は災害のすぐ後だったので、その事故処理だったのだろう。

父はまともに災害対策を行えておらず、ほとんど祖父が代わりにやっていた。

その時、羽ペンを置いて祖父は何故、我々が人間圏と交流を持っていないのか、自由な貿易をしないのかを、ヴェトを膝に載せて本と一緒に読みながら優しく教えていた。

その時、話の根幹となるこの言葉を祖父は言っていた。

「時に【自由貿易】は弊害となる……か」

「え？ 何？」

リルルが一体なんだろうと驚いた顔をヴェトに向けたそんなとき、木戸が開いて、ズドンズドンと床がきしむような巨体が工場の中に入ってきた。

「あいや、これはおじゃまだったべか？」

フホーと大きな鼻息をしたそれは、背中が羽毛で覆われ、頭に牛を思わせる角を生やしている。玄関一杯に広がった巨体には土塊のついたシャツ。腹は筋肉と脂肪でぽっこりと膨れあがり、まるで猛牛と駝鳥を合わせたような生き物。

そう、それはリルルの家によく来る暴れ牛鳥のアラちゃんである。本名はアラドキンス・リンデゲルウスという長ったらしい名前な

のだが、普段ばおつとしてる様相、癒し系の仕草からそんな愛称でいわれている。

「あ、ああいや別にいいんですよ。ランプの大量買い付けの件でしたよね？」

ヴェトを払いのけると、慌てて立ち上がってリルルはアラちゃんに右手を差し出した。

アラちゃんは無骨な顔をにっこりと笑顔に変えて、ひづめのついた手（いや、前足か？）を差し出す。ちなみにアラちゃんは直立2足歩行である。

握手をしたあと、アラちゃんは少し浮かない顔に変わった。

「その件なんだべが、注文できなくなりまひて、今日はおことわりするために来た次第なんだべ」

「えっ……」

リルルは地獄の釜の底をみたように、顔を暗くした。

## 保護関税

「申し訳ないんだべが……」

「な、なんですか？　なんでいきなりそんなこと」

リルルはアラちゃんのシャツを掴んで驚嘆の表情を向ける。

アラちゃんは申し訳ないと頭を下げた。

「最近、西の安い小麦が来たせいでオラの農場の小麦が全く売れなくなっただべ、あちらは平原地帯だべさ、大量に安く小麦を作るんだす。それで全然売れなくなっちまっただ。本当は【小作農】さんの家につけるためにたくさんさんのランプを買う予定だったんだべが……ほんと申し訳ねえだ」

「そ、そんな……」

リルルは力なく床に崩れ落ちた。

「そ、それじゃあこれからどうすれば」

アラちゃんは慌てて言い繕った。

「……あ……ああ……ああ、あの……」

「ど、どうしたんですか？　変な声を上げて」

「いや、ちよつとここに来る道中で良いこと思いついたんだべ。資金繰りに困っているなら人間圏の銀行からお金を借りて当面しのぐってのはどうだべか？」

リルルはなんだと肩を落として苦笑いをする。

「人間圏の銀行は魔物になんかお金を貸しません。ただでさえ経営状態が悪化したうちの工場に貸してくれるわけがありません」

解決策をばつさり切られてしまう。

それでもアラちゃんは蹄を上げて言った。

「じゃあ最近流行の電球っていうのを作る工場を造ればいいんじゃないか。うちに住んでる甥っ子さも早く電球点けてけ点けてけって毎日騒いでるだよ。隣のランさんやボーゴさんも同じこと言っ

てるだ。売り出したら大繁盛間違いなしだべ」

アラちゃんはリルルの肩に手を置いて笑ったその瞬間、リルルはアラちゃんの胸ぐらを掴んで上空に持ち上げた。

「どこにそんなお金があるんですか！ この工場でいっぱいはいなのに、あんまりふざけないでくださいよ！ じゃあアラちゃんがお金貸してくれるっていうんですか？ ええ！」

アラちゃんは上空に持ち上げられると、足をばたばたさせて、ぶくぶく口から泡を吹き出している。

「す、すまんだべ、すまんだべ、は、早く降ろしてけろ」

「やるにしたって、ランプである程度手を稼がなければその工場造れませんよ。まあ私もゆくゆくは電球の工場を造ろうと思ってるんですけど、全然お金が貯まらないんです！ 部外者だからっていかげんなこと言わないでください！」

「ごめんだべ、ごめんだべ、ごめんだべ」

ヴェトは思った。

（リルルって妖精だよな……なんでこんな怪力もってるのこの人）  
茫然とリルルを見るヴェトに目線を合わせたリルルは、口に手を当てて、オホホと笑った。

その瞬間、アラちゃんがズドンと床に落っこちた。

「う、うう……しりが痛いっす……」

アラちゃんは腰に手を当てながら立ち上がって、机に手をついた。そんなとき、また大声が工場内に鳴り響いた。

「うわあああああ、ヴェトいるかなのだ~~~~~~~~~~~~」

~~~~~

半べそかいたポツコルが木戸を蹴って入ってきたのだ。

「た、大変なのだ！ 1/10じゃ冬が越せないのだ！ どうするのだ！」

今頃気づいたようだった。

どうしようかと混乱した挙げ句、ヴェトに助けを求めに来たのだろう。

「うーん。とりあえず、これ食っておちつけ」

食べかけのお弁当をポツコルに差し出す。

ポツコルはぱあっと目から星を出して輝かせて、スプーンでバクバク弁当を食べて、数瞬後、ぷはーっとゲップした。

「ああ……それヴェトの」

とリルルは涙目で言うが、ポツコルはお腹をさすりながらほえ？

と頭にハテナマークを点けてリルルを見る。

「まあいいじゃないか。俺はもう腹一杯だよ」

「うう……今日はついてない日だわ」

「しかし、みんな困ってるんだな」

一同床に目を伏せる。

ポツコルを除いて。

食べている最中にさっき考えてしまったことを忘れてしまったらしく、ランプを作ってる珍しい工程をおっーという声を出して興味津々に見ていた。

ヴェトはそんなポツコルに心を和ませつつ、頭の中には1つの光跡を描いていた。

それはこの事態の解決策。

ヴェトは皇子時代に学んだ学問をフル動員して1つの解決策を思い描いていたのだ。

ただ、実現性があまりにも難しいため、なかなか言い出せなかったのである。

【世界を救う】

それが今ではないか。

ヴェトは拳を握り、心の中にため込んでいたものを思いきって口に出していた。

「解決策はある」

3人は一斉にヴェトを見た。

そしてヴェトはその解決策を話し始めた。

「保護関税の導入だ」

「保護関税え？」

アラちゃんは目を瞬かせ、リルルは首を傾げ、ポツコルは不思議そうにほつぺたに人差し指を当ててぽかーんとしていた。

「何なんでしょうかそれは」

「なんなのそれ？」

「食べられるの？」

ヴェトは皆の反応がある程度想定済みだったので、説得力をもたせるために、胸を張って自信あるそぶりで話を続けた。

話の最中に、自信の無いそぶりを見せると、人は途端に他人の言葉を信用しなくなる。

父がそのおどおどした態度で、よく会談相手に馬鹿にされていたのを思い出したのだ。

人間とは耳ではなく目で相手の話を聞いている。

祖父がよくヴェトに言っていた言葉だった。

「保護関税というのは、国内製品と競合する外国製品にかかる税金のことだ」

「税金ってどういうことなのだ？」

ポツコルはぽえ〜と口を半開きにした。

「3人の窮状の原因は要は西からの輸入品があまりにも安いからだろ。ポツコルは工場で大量生産された家具、リルルは上質なランブ、アラちゃんは大規模農地で作られた小麦という違いはあるが、おおまかにいえば”安い”ことで自分たちの商品が圧迫されているわけだ」

「うーん……まあ、そうね。同じ値段ならまだ勝負になるかもしれないわ」

リルルは素直に頷く。

「なら簡単な話だ。」税金で西の商品の値段を上げてしまえばいい”」

リルルはすぐに眉をひそめた。

その顔は何を言っているのという表情だった。

「いや、それはだめでしょ……」

「何故？」

「だって保護関税が原因で商品が高くなったらみんな怒るんじゃないの？　それで物が買えなくなる魔物も増えるはずだわ」

「いや、そうでもないんだ。実際はみんな喜んで、物も前より買えるようになるんだよ」

「ええ？　なんで？　商品が高くなっちゃうのに？」

リルルは納得がいかない様子で口を尖らせた。

ヴェトは人差し指を立てて、続きを話す。

「それは魔物のみんなが商品をどうやって買うのか考えてみたらわかるんだ。例えばポツコルはシユギの木を切ってそれを元に家具を作って、それを市場で売ってそのお金で塩や鉄を買ってるんだろ？」

「そうなのだ。毎日林でいのししに乗りながらおつきな木を切っているのだ！　それで市場で塩と鉄を買って林に持って帰っているのだ！」

ポツコルは空手で木を切る真似をしていた。

ヴェトはほほえましそうに笑いながら、うんと頷く。

「じゃあ他のみんなはどうか。リルルはランプを売って、アラチャンは小麦を売って色々な生活に必要なものを買うんだろ」

「そうね」

「あい」

「つまりは自分たちで作った物を売って、それで他のものを買うんだ。だから、自分たちの商品が売れなければ他のものは買えないんだよ。保護関税をかけることによって、確かに商品は高くなる。だけど、その分だけ自分たちで作った物が売れるから、高くなった値段以上の収入が入って、前より商品が買えることになるんだ」

「なるほど。ランプをいっぱい売った分だけ他のものが買えるわけね」

「そうだ。それに商品の値段全てが上がるわけじゃない。塩や鉄な

んて毎日常生活で使う商品はほとんど東の国だけで取れるものだから、値段が急に上昇したりはしない。毎日使うもので値段が多少上がるのは小麦くらいなもの。でも小麦は最近になって西の小麦が原因で下がったものだ。西の小麦が入ってくる前の水準に戻ったと皆は考えて、保護関税で西の小麦を追い出してもそれほど反発は無いよ」

「でもいつまでも保護関税をかけ続けるわけにはいかないんじゃない？ 西からの新製品をはねのけていたらずっと東は田舎町のまよ」

「それは大丈夫。自然と自分たちも西の技術に追いつくよ。保護関税をかけてみんなの商品の売れ行きが良くなれば、そのお金を使って、ポツコルが木を切る機械を買ったり、リルルが電球の工場を建てたりできる。そうすれば、この町も自然と競争力がついて西と遜色がない町になるはずだ」

「オ、オラは？」

「小麦はちよつと保護関税がずっと必要かもしれない。どうしても農作物は土地の大きさに依存しちゃうからね。でも絶対アラちゃんの保護関税は解いたりしないよ」

「ほっ……良かっただ」

アラちゃんは胸をなでおろした。

「す、すごい思いつきなのだ！ ヴェトすごいのだ！ これで塩と鉄を買って村に帰れるのだ！」

ポツコルはヴェトの手を掴んでぶるんぶるん振っていた。

アラちゃんは今一話が理解できなかったのか、そういうものかと両腕（両足？）を組んで解ったフリをしていた。

その様子を見てヴェトはやったとにこやかな笑いを浮かべたのだが、1人納得の言っていない者に目を向けて苦笑いをしてしまう。

リルルはふうと大きなため息をついた。

「言いたいことはわかったわ。確かにその保護関税は有用だと思うし、うちのランプも売れてポツコルの椅子も売れて、アラちゃんの小麦も売れて、みんな幸せになると思う。ただどね……ずっと疑問

に思ってたこと言っただけ？」

「どうぞ」

ヴェトは肩をすくめて挑発にも似た仕草をする。

それがかんに障ったのか、リルルは声を荒げてヴェトに言い放った。

「中央の役人でもなんでもないただの靴磨きのあんたがそんなこと言っても、保護関税なんてかけらりゃしないわよ？」

「あ……確かに」

アラちゃんもリルルの言うことに同意する。

リルルは鋭い眼光をヴェトに向けていた。

しかし、ヴェトはその眼光をなんでもないと云ったように不敵な笑みを浮かべて返していた。

「靴磨きがどうやってそんな法律作れんの？ そんな空理空論述べても誰もあんたの言うことなんか聞きやしないわよ。わかる？」

たぶんリルルは、日頃から飯を恵んであげている生活なのに、馬鹿みたいな絵空事を述べるヴェトに腹が立ったのだろう。

そんなことを言うまえに目の前にある靴磨きの仕事をしろということだ。

自分の窮状を解決しもしないで、他人に意見が言える立場かと考えたのかもしれない。

リルルはぶんぶん子供をしかりつけるように怒っていた。

ヴェトはリルルを軽くいなし、両手を顔まで上げて含み笑いを浮かべた。

「それが作れるんだな。これで」

ヴェトは数歩前に歩くと、ポケットに入れてしわくちゃになっていたそれを怒るリルルの前で一気に広げた。

リルルは目の前にでてきたそれに最初視線が合わず、ぼやっと霞がかかったように見えていた。

しかしだんだんと霧が晴れるようにそれが何なのか解ってくる。上部に勇者の絵が、下部にでかでかと文字しつかりと書かれている

のがわかり、その文字を読むとリルルは眉をひそめた。

「世界統一選挙お???」

ヴェトはもう一度その選挙ポスターを前に突き出す。

選挙ポスターはリルルの鼻にはらりと当たり、リルルはむずむずと鼻を動かした。

「くしゅん」

小さなくしゃみをする。

「そう、俺がもう一度選挙で王様になって法律を作ってやる!」

ヴェトはその意気込みを口に出した。

ヴェトはそこでオオオと歓声が出ると思っていた。

目を瞑りその歓声を聞き入ろうと思った。

しかし一向に声が聞こえてこない。

どうしたのかとヴェトは片目を開けてみると、目の前のリルルが震えていた。

おそろおそろ選挙ポスターをどけて見ると、その下から現れたリルルは口元に手を当てて、笑うのをこらえていた。

予想もしないその顔にヴェトは馬鹿みたいに呆けた顔をしてしまった。

「へ、へあ……くしゅん……あ、はなびずでた」

リルルはヴェトから選挙ポスターを奪い取ると、チーンと鼻をかんで、ぽいっとゴミ箱にそれを捨ててしまった。

「で、何か言った?」

半笑いのリルル。

どうしたことかとヴェトは固まってしまふ。

「あんたねえ……靴磨きが王様になれるわけないでしょ?」

「いやでも俺は魔王の孫だから知名度はある。確かに人気は無いかもしれないが……」

「そういう問題じゃないわ……今のあんたはただの靴磨き、いえ浮浪者だわ。そんなあんたに投票してくれる人がどこにいの?」

「いやでも……祖父の友人にかけあえば協力してくれると思うし、

彼らの領内の人々が投票してくればなんとか……」

「魔王山の人たちはあのホワイト・ライズに全員生き埋めにされちゃったじゃない」

「う……」

ホワイト・ライズというのは、勇者につき従った戦士の名前である。その剣術は一振りで万人を横薙ぎにするいわれるほどの強さであった。

ホワイト・ライズは、魔王山攻略後、降伏した魔物達40万匹をその場で生き埋めにした。魔物が極端に人間を恐れるようになったのは、この生き埋め事件の影響が強かった。

魔王山には旗揚げ時に祖父に付き従ったほとんどのものが屋敷を建てて住んでいた。

つまり祖父の友人は全滅に近い状態にあるといえる。

「夢みてんじゃないわよ。あんたは、アタシに弁当めぐんでもらってまじめに靴磨きしてりやいいの。私は自分の力で今の窮状をなんとかするわ」

「なんとかできなかつたらどうすんだよ」

「そんなときは、あんたと一緒に靴磨きでもしようかしらね」

そしてリルルは自嘲したような笑いを浮かべた。

「あたしやあんたの代わりなんていくらでもいるものだから……それもしようがないわ」

「でも……リルルをそんな目に遭わせるわけには」

「いいのよ。私がこんな工場を建てられたのも運が良かったから、あなたと一緒に路上で生活するのも悪くないわ」

リルルはそんな未来を思い描いたのが、ヴェトに空笑いをした。「でも」

言い返そうとしたヴェトに、リルルはまた怒った顔に戻った。

「靴磨きにそんなことできるわけないでしょ！」

ヴェトは拳を握りしめて、わなわなと震えた。

ぐうの音もでなかった。

確かにその通りだったからだ。

ヴェトはただの靴磨きに過ぎない。誰が彼を支援するのだろうか。川で釣りをしてゴミを拾っているような、ペコペコ頭下げて女に弁当をもらっているような、そんな情けない魔物に誰が投票するというのだろうか。

確かに、リルルの言うとおりだ。

ヴェトは何の力もない靴磨きに過ぎない。

ヴェトは悔しそうにぎゅっと目を瞑った。

リルルの言うとおり、自分の代わりなんていくらでもいる。

自分は特別な人間なんかじゃないのか。

そう、ヴェトの心が折れかけたとき、

思い出したのだ。

それを否定する祖父の言葉がヴェトの心の中にあつたことを。

『わしが昔大魔王になると言うとき誰もかれもが反対した。この山に国を作るなど誰もできないと口を揃えて言っていた。お前は特別な者などではないと言った。しかしわしはそいつらの言葉を聞かずに、試行錯誤と努力の積み重ね。それと少々の運でもって、険しい山の国を作ったのだ。』

いいか。ヴェト。よく覚えておけ。

【誰もできないと思ったことを初めに行う者、それを人は豪傑という】

お前も大志を抱き、豪傑になるんじゃない。そうすれば、いずれ大事を為せる者になるだろう。』

ヴェトはそのことを思い出し、目をカッと開かせた。

「それでも俺は、選挙に出て、みんなを助けたんだ！」

リルルは自分の言うことを聞かないヴェトにため息をついた。

「はあ……アラちゃんもそう思うでしょ。ヴェトにそんなことができるわけないって」

いきなり話を振られたアラちゃんは驚いたが、う……と胃の奥底からうなり声を上げたあと、首を縦に振った。

「ヴェトの気持ちはわかるんだが……のお、やっぱり靴磨きには荷が重いだべ……」

「ね。ヴェト。あんたも真面目に仕事して、そんなこと忘れなさ……」

ヴェトが二の句を継げようと思ったそのとき、部屋中に大声が鳴り響いた。

「みんな、ひどいのだ！」

皆が一斉にその声の方に振り向く。

そこには目尻に涙を浮かべたポツコルが机の上に立っていた。

「ヴェトは一生懸命みんなのために選挙に出ようとしてるのだ。なんで靴磨きだからって受からないと思うのだ？　なんで投票しないと思うのだ？　そんなの関係ないのだ。良い王様はお金持ちとか良い職業についている人間になるものじゃないのだ。みんなのことを思ってるみんなのために働く人になるべきなのだ。リルルもアラちゃんも言ってることがおかしいのだ！」

「そうは言ってもね。できることでできないことがあるのよ……わかる？」

「わかんないのだ！」

「ふん。これだからコロボツクルは……ガキね」

ポツコルはリルルに向かっていっつと歯を出した。

一触即発の空気、アラちゃんは二人の間でオロオロし、ヴェトは突然の自体にぽかんと突っ立ったままだった。

「いいのだ。それならリルルとアラちゃんは勝手にすればいいのだ」  
ポツコルは机からジャンプして降りると、ヴェトの傍まで駆け寄り、袖を引っ張った。

「みんなが助けなくてもボクだけはいっていくのだ」

「いやでもポツコル、確かにリルルの言うことも正しい。ポツコルは何を根拠に俺が選挙で勝てるなんて信じてるんだ？」

「そんなの」

一呼吸あつてから、ポツコルは目をしっかりヴェトに合わせて言つた。

「トモダチの言うことを信じるのは当然なのだ」

ヴェトはポツコルに感激してしまった。

目を瞑り、天を見上げたあと、うんと頷く。

「それじゃ、二人で役場まで立候補しにいくか」

「行くのだ行くのだ」

ヴェトは木戸を開けて外に出る。

するとスライムナイトが慌てて隣で立っているのが見えた。

たぶん、中の騒ぎを聞いていたのだろう。スライムナイトはヴェトとポツコルを見ないようにあちらの方を向いて、口笛を吹いていた。

ポツコルがヴェトの腕に絡みついて、八重歯を出してにつこり笑っていた。

「ヴェトなら絶対に受かるのだ」

「ありがとう」

その様子を見ていたスライムナイトの目からほろりと涙が流れているのが見えた。

ずいぶん涙もろいやつだなとヴェトは思った。

そんなとき、工場の奥から足音がして、木戸が大きく開かれた。

「ちよつと待てえ、私も行くわ！　うわ、何ひつついてんの！」

リルルが慌てて飛び出してきて、ヴェトにくつついているポツコルを見て驚く。

「なんだよ俺が選挙に出るの反対じゃなかったのよ」

「べ、別に……あんたたちだけじゃ不安だからあたしもついていくだけよ。立候補するには選挙資金が必要だわ。服だってちゃんとしたものが必要だし、ポスターだって必要よ」

リルルは顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

そしてこう言った。

「ごめん……ね」

ヴェトはふつと笑った。

「これからがんばろうな！」

リルルの肩に手をぽんと置く。

するとリルルは顔を上げて、明るい顔に戻った。

と、そんなところで、ヴェトの視線に、リルルの後ろに隠れるようにアラちゃんが入った。

「オ、オラも手伝うだよ」

「ありがとうございます」

「よしじゃあ3人力を合わせてヴェトを当選させるのだ！」

ポッコルが拳を振り上げ、それにつられるように他の3人は空に向かって拳を振り上げた。

空は雲1つない快晴。

これから行く町役場への道は人と魔物でこった返していた。

## 温泉

町役場で立候補をしたあと、俺たちは麓の山に登った。

「おつふる！ おふる！ おーふる！ なのだ！」

体に布を巻いたポツコルが岩の上からジャンプして温泉に飛び降りた。

水しぶきをあげてぶくぶくと顔までつかるポツコル。

そのまま、温泉で平泳ぎを始めた。

「ぷはー、泳ぐのだ！」

「あんまはしゃぐなよ。他にも客がいるんだから」

ふうつとヴェトは頭に布をのつけて、ゆつくりと温泉に浸かった。何故温泉にきたのかというと、ヴェトの体を洗うためだ。

何せヴェトは頭はシラミだらけ、肌は垢で真っ黒と、何年も路上生活していたヴェトの姿はまるでコジキである。

これじゃいくらなんでも酷いということで、リルルにお金をもらって温泉に行つて体を洗つてこいと言われたのだ。

「リルルには感謝しなきゃな……」

リルルは昼の件をまだ気にしていたようで、少しおどおどしながらポツコルにお金を渡して二人で行つてくるように言ったのだ。

道中ついてくるのも気まずいようだった。

ヴェトは別にリルルのことが嫌いなわけではない。

むしろ好きなのだ。

ただ、その感情はリルルがヴェトに向けているものとは違い、あくまで感謝とかそういう類のものではあったのだが。

「まあ当選したときにこのお礼は返すか」

真っ赤にのぼせた顔で、遠くの夕日をヴェトは見ていると、がばつと水の中からポツコルが顔を出して、いきなり手で水をかけた。

「ヴェト、油断大敵なのだ」

「え？ ああ」

「むうくなんなのだ。その反応はつまんないのだ」

「え……悪い」

「ふんすかふんふんなのだ」

ヴェトはかなり頭がぼつとしているようで、視界をクラクラさせながら、ポツコルを見ている。

するとだ。だんだんと視界がはつきりしていくとポツコルの小麦色の肌が見えてくるようになった。

（ああ、巻いていた布がはだけたんだな）

少し間があつて、疑問が浮かんた。

そういえば、なんでポツコルは男なのに、胸まで布を巻いていたのだろうと。

そしてヴェトの思考がゆっくり動き出すと、ポツコルの胸の当たりと、腹部の下に強烈な違和感がぶち当たった。

胸の当たりが少し膨れて、腹部の下にあるべきものがない。

いや、というか、腹部の下にあの〜なんというか、二つの丘がみえるのである。

ヴェトは目をごしごしこすってポツコルの体を上から下に注視していった。

「え……おま、まさか……」

「どうしたのだ？」

「女？」

「それがどうしたのだ？」

チーンポクポクポクチーン

「え？ まじで？」

「そうなのだ、それより、頭の洗いっこするのだ。」

手に砂利を持って頭に擦りつけようとするポツコル。

ポツコルの体がヴェトに覆い被さつて、その胸の当たりにあるさくらんぼがちらりちらりとヴェトの体にひつついたり、離れたり、ひつついたり、離れたり、した。

ヴェトが慌ててポツコルをはねのけようとするが、ポツコルはヴ

ヴェトが一旦温泉から出て逃げようとしたとき、つるんとすべって、すってんころりん。

そんな時である。

アラちゃんが戸を開けた瞬間に、大声を上げ、それは山頂から町まで響き渡るようなまびこになった。

アラちゃんの背中越しに埴輪のような顔になったリルルが顔を出していた。

リルルは体にタオルを巻いたまま、ズシンズシンと大地が割れるような足取りでヴェトとポツコルに近づいた。

「う、これはその……洗いっ……?」

「そうなのだ〜！　ボクの大事な部分と、ヴェトの大事な部分を洗いつこなのだ〜！」

「へへ大事な部分を洗いつこ。一体どこを洗うのかしらね」

ね

リルルは両端を指で引っ張ってにっこりと笑った。

笑うという行為は本来攻撃的なものである。

「魔力全開！ ニードルタイフーン！」

リルルの羽が羽ばたき、それは目の前に竜巻を発生させた。

妖精族最大魔術ニードルタイフーン。それは10mはある木々をなぎ倒し、家すらも吹き飛ばす。最大風系魔法である。

「うあああああああ 誤解だあああああああああ…… ああ  
あ……… ああ……… あ………」

キラン

ヴェトはその日、星になった。

ポツコルは夕日の彼方へ飛んでいくヴェトを指をしゃぶりながら見ていた。

「脳みそを守る大事な髪の毛を洗い損ねたのだ……」

遅いよ……と空中できりもみ回転をするヴェトは思ったとか思わなかったとか。

## 空中戦

翌日、少し曇りがかった空模様のなか、ヴェトはリルルに青魔術師の一張羅を着せてもらっていた。

西の縫製工場で作られたピカピカの新品だ。

エリが立っていたり、マントが翻っていたり多少、成金趣味のような感じだが、青一色に統一されたそれは非常に印象が強い。

何よりも立候補者は覚えられることが重要だから、この格好で正解なのだろう。宮廷の黒魔術師のような、黒づくめの地味な服装も検討したが、アラちゃんの羨望の眼差しを見るに、選ばなくて正解であったといえる。

「よし」

リルルはヴェトに服を着せると新聞記事を差し出した。

「なんだ？」

「ああ、支持率よ。次誰に投票するかって【世論調査】が載ってたからもってきたの」

「お、そりゃいいな…… つつても俺はかなり低そうだけど」

ヴェトは自嘲するように頭を掻く。

「……びつくりするわよ？」

「え？」

「早くみなさいよ」

ヴェトは工場のリルルの椅子に座ると、新聞を事務机の上に置いてめくった。

### 立候補者支持率

『質問内容 次の選挙で投票するのは誰ですか？』

町の中央広場で5000人に聞き取り調査をし、有効回答数は1540人でした。

|             |    |     |      |
|-------------|----|-----|------|
| キング・カット     | 略歴 | 勇者  | 50%  |
| ヴェストゴギア3世   |    | 略歴  | 魔王の孫 |
|             |    | 30% |      |
| プリオリティ・コットン | 略歴 | 投資家 | 5%   |
| リュウ・ホウ      | 略歴 | 公務員 | 1%   |
| 支持なし        |    |     | 14%  |

ヴェトはその数字が信じられず、何度も自分の支持率を指でなぞった。

「ちよつと待て……30%？ まだ何も選挙活動してないのになんでこんなに高いんだ？」

「それだけ元魔王つて経歴がデカイつてことでしょ。悔しいけどあんたの言った通りだったわね」

ヴェトは拳を握って勝ち誇る。

「よし、よしよし。これなら勝算はあるぞ。勇者との差はたった20%。この程度の差なら、十分逆転できる」

喜ぶヴェト。しかしリルルはそのヴェトの様子を訝しげに見ていた。

唇に親指を当てて、じつと考え込むような仕草をしている。

ヴェトはその様子が気になった。

「どうしたんだ？」

「いや、でもこれつてあんたが大魔王の孫だから。これだけ高い数値なのよね？」

「そうだと思う」

「それつて……本当のあんたのこと知らないで、みんながイメージだけで支持してるつてことよね？」

「まあそうかな……」

「それつて危険じゃない？」

「え？」

意外な言葉にヴェトは目を丸くした。

「いやだってそれってヴェトをあの一代で一国を作ったヴェストゴギア様に重ね合わせてみるってことでしょ。でもヴェトにはそんな実績も何もない。それって、風で飛ぶような薄っぺらな支持じゃないのってことよ」

「まあ、それはそうだが、これから少しずつ俺を知ってもらって、祖父と同じくらい……とはいわないが十分みんなの暮らしを良くしていける王様になるって知ってもらうよ。保護関税のことを話せば支持してくれるさ」

「もし、もしよ……ヴェトが何か、みんなを失望させることをしちやったら……この数字、一気に0にまで落ちちゃうと思うの」

「心配すんなよ。なんとかなるさ」

ヴェトは親指を立てて、その自信を示す。

しかしそれをされてもリルルはその不安そうな表情で固めたままだった。

ヴェトはどうやってリルルの不安を解消しようかと思っていたところ、ポツコルが木戸の下からひよこつと顔を出したのが見えた。

「おゝヴェトかつこいいのだ」

ヴェトはポツコルの方に走ると、人差し指と中指を立てて、調子に乗る仕草をした。

「そうだろ」

「すごいのだ」これで当選確実なのだ」ポツコル惚れちゃうのだ」その言葉にぴくりと眉根を寄せるリルル。

リルルはぎいっと軋む床を歩くと、二人の間に割って入り、今にもくつつきそうな顔を引き離した。

「まだ何もしてないのに時期尚早です」

「ま、そうだな。まだ何もしていない」

「で、これからどうするんですか？」

ヴェトは肩をすくめると、こういった。

「【空中戦】だ」

「空中戦？ 戦争でもするつもりなんですか？」

「ああ、知らないのか。空中戦ってのは選挙用語だよ。中央広場で演説したり、新聞やビラで宣伝活動することを指すんだ。不特定多数の支持が曖昧な層に訴えかける選挙戦術のことを指す」

「へー、そんな言葉があるんですか」

「現在の状況を整理するとだ。この統一選挙は人間圏、魔王圏、そしてエルフ圏の3つの地域を統べる王様を選出するために作られたものだ。選挙日時は1ヶ月後、この3つの地域の住民全てが投票する権利を持っている」

「ふむふむなのだ」

ポツコルが解ってるんだか解ってないんだかアゴに手を当てて首を縦に振る。

その様子を見て、リルルはポツコルをきつと睨んだ。

「ここまで地域が広がっているとだ。いわゆる1人1人の家を回って支持をこうというやり方はできない。何せ、3つの地域全ての人口は合わせて200万人だ。家を一軒一軒回ってたら日が暮れちゃう。だから新聞やビラ、または中央広場で演説して不特定多数の支持を一気に得る方法をすべきだと思う」

「だから空中戦ってわけね」

「そうだ」

「じゃあビラを作るのだ！ 新聞に広告を載せるのだ！」

はしやぎ回るポツコル。

それをヴェトは苦笑いして見ていた。

「うん。そうなんだけどね……」

「どうしたのだ？」

「うん。そうなんだけど……」

ヴェトは頬から汗を滴り落とす。

次の言葉を言うのに戸惑っているようだった。

「どうしたんだべ？ 何か問題でもあるべか？」



しかし、リルルは容赦しない。先ほどまでヴェトの髪を解いていた櫛を粉々に砕くと、八重歯をむき出しにして、まるで魔王山にいたとされる双頭の魔獣ドスゲルを思わせるような怒りの顔をした。

「あんた……スツたわね」

「ご、ごめんなさ……い」

ヴェトは床にひれ伏して、壊れた鳩時計のようにガンガン地面に頭をたたき付けた。

リルルは口の端をひくつかせながら、ヴェトの頭に足を乗っけてぐりぐりと地面に押し付けた。

「どういづつもりなのよ！」

「いやだって、5万リヤンじゃちつさな新聞広告を3回くらいしか出せないと思っだし、ビラだってそう多く作れない。これじゃ足りないなあと思っだから、増やす必要があると思っただよ。で、温泉の帰り道になんと、俺がよく靴磨きで稼いだ金をつぎ込んでいた賭場があるじゃないですか。で、今日はなんと親大放出デーだったので、20倍ですよ20倍。こりゃやるしかないなと」

「それで、全額つぎ込んだじゃったわけ！」

「バ、バ、バツカヤロウ！ 全額じゃねえよ！ 俺を見損なうんじやねえ！ ちゃんと残してるわ！」

「はあ？ どのくらいよ！」

ヴェトはリルルに踏まれたまま、唇をうにようにとミミズがのたくったように震わせながら、ポケットから小袋を取り出す。

小袋は手のひらに乗るくらいの小さなものだ。

ヴェトは立ち上がって、その小袋のヒモを解くと、リルルの手のひらに中身をぽとつと落とす。

銀貨が5枚くらい落ちてきた。

「うあああああああああああ」

リルルはあまりの事態に恐怖の叫び声を上げてしまう。

ちなみに、銀貨1枚100リヤンである。

500リヤンは、西の物価だと大体筭が一本買えるくらいだ。

リルルはヴェトの襟を掴んでぶるんぶるん振った。

「これ、どーすんのよ！ 選挙資金ほとんど無くなっちゃったじゃない！ 筭しか買えないじゃない！ 何筭で内の前をさっさっさーって履くわけ！ さっさっさーって！」

「落ち着けよ」

「落ち着けるわけないでしょおよ！ 空中戦できないじゃない！」

「いや演説はできるから……ね。落ち着いて、首が絞まって息が苦しい」

「あんた1ヶ月で人間圏と魔王圏の全部の町回る気？ 魔王圏は山が険しくて【鉄道】も通ってないから1ヶ月じゃ3分の1も回れないわよ！」

「うーん。そうだね」

「そうだねじゃないわよ！」

「あゝ首がゝア、アラちゃん助けてくんね？」

アラちゃんもこのことに関しては呆れており、額に蹄を当てながら、首を振っていた。

ハハハとヴェトは空中に手足をぶらんぶらんさせながら空笑いしてしまう。

「ヴェト」

そんな折、ヴェトの隣にポッコルが現れた。

「おお、ポッコル。お前は味方してくれるか」

救出を期待してにこにこことポッコルを見るヴェト。

ポッコルは伏せていた顔をヴェトに見せた。

その顔は眉をナナメにして口元をきゅと引き締めたポッコルの怒った顔だった。

「べ〜〜〜〜〜〜〜だ！ 大地の精霊様は賭け事をする魔物が大嫌いなのだ！」

ポッコルは目の下を引っ張って舌をだし、ヴェトの股間を蹴り上げる。

「はう！」

股間に切ない痛みをヴェトは感じながら、だんだんと意識が遠くヴェト。

ぶんぶん怒りながら背を向けて工場を出て行くポツコルに、こいつ純粹だなあなどと思いながらリルルの強烈股間キックで意識が暗闇へと落ちた。

## 中央広場

まあ、そんなことがありつつも3人は氣を取りなして、演説をするために中央広場に移動した。

この町の中央広場は商業活動の中心地である。町に不釣り合いな4階建ての公使館がどんと中央にそびえ立ち、それらは鉄の柱に大地から出る油、石灰、木の汁などを合わせて作られた強靱なものだ。険しい山の国はその名の通り、火山地帯であり、地下にある地面の動きによって地震がよく発生する国である。従来 of 石で作られた建築物はすぐ倒壊してしまうため、魔物達は多くの場合、木の家に住んできた。壊れてもすぐ直せるようにである。

しかしこの建物は山が崩れる大地震に耐えられるほどの強度で設計されているため、地震でもびくともしない。実際、5年ほどまえに起きた地震でも郊外の煉瓦マンションは倒壊して多数の魔物が死んでしまったことがあったのだが、この公使館は全くひび1つすらなかった。

ここに住む者は黒装束に身を包んだ宮廷魔術師達……要は官僚である。

今もふてぶてしい顔をしながら黒いシルクハットに、黒のスーツを着込んで、個人用の漆黒の馬車に乗り込んでいる。

こういった公使館が建ち並ぶ周辺にはこの宮廷魔術師達が散財するため、酒場、衣服店、宝石店など、商人達が様々な商業施設で商売している。さらにその商人達が生活するために、郊外からやってくる食料品店、雑貨屋、飯屋などで働く労働者達が道路に思い思い勝手に屋台を作って、結局、昼になると中央広場に街中全ての人間が集まるのである。

馬車が入混みをかき分けるように走り、毎日一回は肩がぶつかったといって喧嘩が起きる始末である。

行政が道路の整備や区画の最適化をせず、自由放任にまかせた末

路がこの中央広場の惨状といえる。

しかし逆に言えば、街中の人間が昼になると一挙に中央広場に集中するということであり、ヴェトは丁度良いと、ここで演説をしようと思ったのであった。

ヴェトは腰にかかえていた木の箱を公使館前の花壇に置く。

ポツコルがしょってきた立て看板を地面に斧の刃のついていないほうをトンカチのように使って、よっこいしょよっこいしょと地面に突き刺す。

リルルが『次期世界統一選挙 立候補者ヴェストゴギア3世』と書かれた紙を釘で打ち付けて、演説の準備をしていた。

ヴェトは多少不満げな顔で腕を組んでいた。

「しかし本当に木の箱の上に乗って演説するのか？ もうちょつとちゃんとしたものは無いのかな……足場を鉄材で作るとか、今西ではやりの【マイク】とか使って大音量をするとか、なんかちゃつちいんだよなあ」

そのセリフを聞くと、トンカチを持っていたリルルの手が止まった。

こちらを見ずにボソツと独り言を言った。

「誰かさんが私のお金を全部使わなかったら、製鉄所で余り物の鉄材とか、マイクは無くても拡声器くらいは買えたんだけどね……」

「そうなのだそうなのだ」

立て看板を持つポツコルがうんうんと目を瞑って頷いていた。

「うっ……いつまでも根に持ちやがって……」

リルルは口をわなわなさせて、首をナナメにして、トンカチでヴェトの頬をぺしぺしと叩いた。

「あの金を稼ぐのにどれだけかかったと思ってんのかなあ？ ああん？ こっちは毎日毎日仕事してさあ、あれ稼いだわけよ……それをあんたは一日でバクチに使っちゃったわけ。わかる？ このトンカチでもう一回あんたの股間ブツ叩いて不能にしちゃおうかしら」「す、すいません……」

「まあまあ、そんなに気を落とさないほうがいいべ。ヴェトが王様さなったら、リルルさももつと楽な生活できるだよ。王宮で二人つきりだべ」

アラちゃんがそんなことを言うと、リルルはぽつと顔を赤らめて顔を伏せた。

「いやだもう、アラちゃんたら」

そんなリルルの横でヴェトは真顔でアラちゃんに言い返した。

「でもアラちゃん。新しくできた官邸の部屋はそんなに数ないからな、公設秘書としてポツコルとリルルとアラちゃんの3人全員はいるのはきつくはないか？」

ヴェトの足をリルルが踏んづけた。

「いてえ！」

ヴェトは踏んづけられた足を持って飛び上がった。

「な、なんだよ？」

「死んじやえ！」

「な、なんなんだよ……意味がわからねえ」

さつきよりさらに機嫌が悪くなったリルルに、訳がわからないと言いたげなヴェトであった。

「それはそうと、ヴェト、ボクはこれからどうしたらいいのだ？」

ポツコルは花壇の端に腰掛けて、暇そうに足をぶらんぶらんさせている。

あらかた仕事が終わりは後は演説するだけであった。

ヴェトは広場を見渡したあと、うーんと腕を組んでうなづてしまった。

「もう少し人が集まってから演説するけど、特にポツコルにしてもraithたいことが無いんだよなあ……」

「そうなのか。暇なのだ……暇すぎて死んでしまいそうなのだ」

「じゃあまあ、ポツコルは始まったら警備でもしてくれ。まあ無いと思うけど、演説を妨害する連中が時々いるらしいから」

「それじゃあ悪い奴がでたらこの背中の大斧でブツ倒してやるのだ

！

ポッコルが背中に背負っている大斧は優にヴェトの背中ほどもある巨大なものだ。こんなもので斬りつけられたら頭からまっつぶたつになってしまっただろう。

「俺が良いというまで絶対にその斧は振り回しちゃだめだからな」

「そんなこと解ってるのだ」

正拳付きを震うポッコルがいささか不安なヴェトだった。

どうもやる気を出し過ぎて暴走してしまいそうな感じもする。やる気だけが先行すると大抵失敗してしまうものである。気を休める必要があるとヴェトは思った。

ヴェトは自分の風呂敷の中から、青い表紙の本を渡した。

「わゝ久しぶりのヴェトの本なのだ」

「それ読んで始まるまで大人しくしてな」

ポッコルは腰掛けると楽しそうに本をペラペラめくっていった。

リルルは不可思議な様子でヴェトに声をかける。

「なにあれ？」

「ああ、絵本だよ。絵本。この本の話はなんだっけなあ……恋愛物だったかな」

「へゝそんなのあるんだ」

「ああ、魔王山では結構ブームだったんだぜ、色によって題材が違っていて他には黄、赤、黒がある。ポッコルが文字読めないってんで、魔王山から持ってきたやつを読み聞かせたのが始まり。最初は赤の童話だったかな。次は黒だったけど、あれは話が地味で面白くないと言ってたっけ……ま、そんなこんなで今ではポッコルも自分で本を読めるくらいになったよ」

「ふゝん。子供っぽ」

「おいおい、これでもポッコルは俺と同一年なんだぜ。リルルと違って【村の私塾】に行つてなかったから当然だよ」

「読み書き算学ができるのは町人として当然よ。ふん。いつもポッコルの肩持つんだから」

リルルはぶいっと口をとがらせてそつぽを向く。

ヴェトはやれやれと頭を搔くと演説の草稿に目を移した。

リルルはちらつとヴェトの方を見てから、そろりそろりと近づいて、ヴェトのすぐ後ろから顔を出した。

「何読んでるの？」

「演説の内容。ぶつ前に確認中」

「ちよつと見せてよ」

「え？ あ、ああ……：そーいや見せて無かつたな。悪い悪い」

おどけるように首を搔くと、ヴェトはリルルに10枚はある草稿を渡した。

渡された瞬間に、まずリルルは渋い顔をする。

そして目線を紙の上に走らせて、紙を一枚一枚めくるたびに、どんどんその顔は険しくなっていくた。

「……うーん」

「え？ 難しそうな顔してどうしたんだ？」

「いや話が頭にうまく入ってこないっていうか、難解な単語がいっぱい出てきて……でもまあ、お偉いさんの話す内容ってこんなもんだからいいのかしらね……」

草稿の内容は終始、保護関税についての話だった。

それが10枚に渡って改行もなくぎつしり詰まっていた。

ヴェトの知識を最大限使って、話を書いたのであった。

自分が一生懸命書いたものにケチをつけられたのが、不快に感じたらしくヴェトは口を尖らせてリルルに怒った。

「何だよその齒切れの悪い話し方」

「ぶつちやけていうと”わかりにくい”の。こんな10ページにも渡って難しい話してもわかんないんじゃない？」

「わかるってば、それはリルルの頭が悪いからだよ」

いきなり頭が悪いなどと言われたのでリルルがムツとヴェトを睨み付ける。

ヴェトは慌てて言い繕った。

「わ、悪かったよ」

「別に、否定はしないけど……確かにこの【経済学】のことって全くわからないから。だけどさ……投票する人のほとんどがこの【経済学】のこと知らないんじゃない」

「ん、だからどうしたんだ？」

「いやだから、こんな難しい話されても、誰も聞いてくれないんじゃないってこと」

「……別に大丈夫じゃないか？」

ヴェトは飄々としてそんなことを言った。

リルルは眉をひそめたが、ヴェトは動じなかった。

ヴェトはこう思ったのだ。

昨日、リルル達に話した時はみんな、ちゃんと聞いてくれたし納得もしてくれた。だから、町の人たちに同じように話せばきっと解ってくれると。

リルルもそれ以上の追求はしなかった。

リルルにとって選挙のことはよくわからなかったし、ヴェトが強く言うなら演説とはそういうものなのだろうと思ったのだ。

自分は選挙に関しては門外漢である。

それなら選挙に詳しいヴェトに全部まかせるべきだと思ったのだ。

「そっか。ヴェトがそういうなら大丈夫ね」

リルルはヴェトに草稿を返すと立ち上がった。

「あ、そうだ。ちょっと借金してる人に会う約束があるから抜けるね。一昨日から返済の件で五月蠅いのよ。ま、心配しないで、演説が始まるお昼頃には返ってくるから。その間は、アラちゃんとポツコルに……ってあれ？」

いつの間にか、花壇に座っていたポツコルも、ぼおっと立っていたアラちゃんもいなくなっていた。

リルルはどうしたのかと首を傾げる。

「飯でも食いに行ったんだろ」

「そう……かしらね」

「ま、俺を襲う連中なんていねえから。リルルも気にせず席を外していいよ。ほんとには怪力のリルルがいると頼もしいんだけどな」

「か、怪力ってなによ」

「悪い悪い。じゃな」

「じゃあね」

リルルはヴェトに手を振って人混みの中に去っていった。

ヴェトはリルルに手を振り終わると、木箱の上に座って、頬杖をついた。

そしてうとうとと眠ってしまった。

昨日夜遅くまで演説原稿を書いていたからだろう。

眠っていても、ヴェトの手にはその草稿がしっかりと握られていた。

ただ……後から考えればこのとき演説内容を修正すべきだったのだ。

油断という油を乗せた熱気船はゆっくりと目には見えない氷山へ突き進んでいた。

幸せそうに眠るヴェトは、これから怒る悲劇をひとつも知らなかった。

## 勇者と経済学者

「あ、やべ、眠っちまったか……」

目を覚ましたヴェトは周りを少し見渡し、人が大勢1つの方向を向いているのを見た。

どうしたのかとヴェトは思ったがすぐにわかった。

彼らは何かのビラを持ち、彼らが向いている方角から声が聞こえてくるのだ。

おそらく誰かがすでに選挙演説を初めてしまったのだろう。

「あれ、おかしいな。こつちが先に道路占有許可を役所に提出してたのに、一体誰がやってんだ」

と、ヴェトは眉をへの字にして、木箱の上に乗った。

ごった返す人混みの中からヴェトはひょこつと顔を出して、誰が演説しているか確認しようとしたところ、その光景に驚いた。

馬鹿でかい鉄材で作られた台座の上で、マイクを握った勇者が立っていた。

しかしこれは驚くべきことではない。問題は

その勇者がまるでオオカミがウサギを捕まえるようにポツコルの首根っこを掴んで、宙づりにしていたからだ。

「ポツコル!？」

すぐに勇者の演説内容が聞こえてきた。

「あーこの魔物を殺してもいいと思う人挙手」

「はなせ! はなせなのだ!」

中央広場に集まった人間達はパラパラと手を挙げていく。

ヴェトの隣に居た奴もへらへら笑いながら手を挙げていた。

ヴェトはカッとなって、そいつの顔をぶん殴った。

そいつはくると回転しながら地面に倒れ伏した後、何が起ったのかというように頬に手を当てて辺りを見回した。

「あ？ な、なんだ？」

「ふざけてんじゃない！ 命がかかってんだぞ！」

「あ？ てめえ魔物か？ あんまナメつてと……」

「うるせえ！ 俺は魔王の孫のヴェトだ。あんまナ言ってるやつ裂きにすんぞ！」

「え？ 魔王の……ひつ、ひい……」

そいつは手足をバタバタとさせた後、人の間をすりぬけて逃げていった。

周りにいた人間達は目を点にしてヴェトを見つめる。

そんなことなどまるで意に返さないようにヴェトは、人混みをかき分けて勇者の下へと走っていった。

スピーカーから出る勇者の大音声が広場の中をかけめぐった

「あーひいふうみい……あ、もうわかんねえや、おい、賢者エリザ、ちよつと魔法使つて数えてくれよ」

隣にいた黒いトンガリ帽子に黒いスーツを着こなした宮廷魔術師の風体をなした者は、呆れたように言い返した。

「魔法はそんなに便利じゃありません。あとですね……経済学者エリザと呼んでください」

「わりいわりいエリザ、魔法はつかえねーもんねー、ちよつと大きなことしようとするとか詠唱時間がえらいかかって使いものになんねー。だからこそ俺等人間が魔物に勝てたと言える。俺等は科学使ってるな。あの戦いを勝ったのは人間の科学の勝利よ」

マントを翻しながら親指を立てて勝利をアピールする勇者。

自分たちの自尊心をくすぐられた人間達は勇者に向かって拍手喝采をした。

「魔物達は生きる価値ねえよな！」

「こーろーせ！ こーろーせ！ こーろーせ！ こーろーせ！」

まるで電動ノコギリの刃のような殺人の大合唱が中央広場を埋め尽くした。

それは工場で働くような粗野な人間達だけではない。

エプロンをまとう主婦も、アメを舐めるような子供も、シャツだけを着る貧乏学生も、杖をつく老人も老若男女全ての人間達が興奮した様子で殺せと連呼していた。

ヴェトは思った。

（なんだこいつら……ポツコルがお前等に何をしたんだ！

なんでそんな酷いことを何も知らない他人に言えんだよお前等！）

ヴェトは最前列で拳を振り上げていた女学生を蹴飛ばすと、カンカンと甲高い音を鳴らす鉄の階段を昇って、勇者の顔に拳を振り上げた。

「ポツコルを………離せええええええええええ」

「おつと悪の親玉がきましたかつと」

勇者は腰に差していた剣を刹那の速さで抜くと、ヴェトの首筋に当てた。

「動くと言飛んじやうぜ？」

ヴェトはその動きに一瞬止まる。

しかしヴェトはにやりとほくそ笑んだ。

ヴェトにはとっておきの隠し技があったのだ。

それは魔王家にだけ伝わる爆発魔法。

一般に魔法の威力は勇者が言うように詠唱時間に比例する。

しかしどんなものにも例外、いや抜け道がある。

考えれば簡単な話。

それは物質を移動させる転移魔法（物質の量に詠唱時間が比例する）を使つて、ほんの少し

、手の平に乗る程度の火薬を転移させるのだ。

その後はマッチの火が点く程度の火炎魔法を唱えるだけ。

その火は火薬に引火し、敵の目の前で爆発する。

これを通常の魔法でやろうとしたら10分はかかるだろうが、この方法では3秒で十分。

ヴェトが唱える爆発魔法とは、化学と魔法の概念を混交させることで、瞬時に強力な爆発魔法を唱えることなのだ。

その名も魔王家直伝【ハイブリット魔法】

「ヴェラガ！ ブラガ！ スラバ！」

勇者の前に、硫黄、木炭、硝石を転移させる。

目の前に何か黒い物がでてきたことでぽかんとする勇者。

その表情を見てヴェトは勝ったと思った。

（こいつは何が起きているのかまるでわかっていない、今日の前にあるのは黒色火薬の原料だ。後は火炎魔法を唱えれば、こいつの目の前で爆発する。爆発自体は小さいからポッコルや俺に被害はないが、勇者の顔は吹き飛んで真っ赤なスイカみたいになるだろうな！）  
「ファイ……」

ヴェトが口を開いて火炎魔法を唱えようとしたとき、ヴェトの体が固まってしまった。

（な、なんだ？）

勇者も固まったまま、リルルも固まったまま、民衆も固まったまま、そして全ての世界が灰色に変わってしまったていた。

（な、何がおこっている？）

そんななか、

「あら坊や、時間停止状態でも思考が働くのね。魔王家は頭頂部にも魔法の影響を防ぐ反射魔法でもいれてるのかしら」

あのエリザといわれた女が人差し指を目の前で揺らして、俺の目の動きを確認しつついきなり現れていた。

「あまり野蛮なことはいらないでね」

そついうと掌底でヴェトの顔を叩いた。

その瞬間、ヴェトは後方に吹っ飛んでしまう。黒色火薬はパラッという音を立てて、鉄のタイルの上に散ってしまった。

ヴェトは鼻からでた血をぬぐったあと、立ち上がった。

「な、なんだお前……今のは」

「今のは、合体魔法かな。一度に二つの魔法を唱えられるの。時間停止魔法と身体転移魔法を使ったのよ。二つ混ぜちゃうと、魔法の触媒作用っての？ それで大体10秒くらいでできちゃうのよ。あ

あ原理は聞かないで、あたし魔法工学が専門だったから理論の方はさっぱりだから。時間停止魔法なんてあまりにも止まる時間が短くて使えない使えないなんて世間じゃ言われてるけど身体転移魔法と混ぜちゃえばつかえるのよね」

「お前はまさか……あの、勇者と共に魔王山を攻略した」

「そう、リカード・エリザベス、昔は魔法使い。今は経済学者をやってます」

そういうとエリザはウィンクした。

そのエリザをどけるとあのポツコルを手に持った卑劣漢が不敵な笑みを浮かべながら自己紹介をする。

「それで俺がジェエル・カットだ。よろしくな！」

ああごめんごめん。って知ってるよなあ？ お前の親族全員ぶっ殺したの俺だし！」

会場からどつと笑い声がした。

想像とはあまりにも違う勇者の様相にヴェトは目を疑った。

ヴェトが聞いた勇者の性格とは理知的で慈愛的で、敵ながら逆に主君として仰ぎたくなるような人物であった。少なくとも新聞や人づてではそう言われていた。

であるからヴェトも親兄弟を殺されたとはいえ、ヴェトは半ば羨望にも似た感情に囚われていたのだ。

ヴェトは仕事の休憩の合間に新聞を読みながらこんな人間になりたいと思った。

それが実際に目の前に現れた勇者とはなんだろうか。

これはただの……チンピラではないか！

「何故こんなことをした！ ポツコルに何の罪がある！」

「ああ？ なんつうの？ 生意気だったからっつーの？ いきなり俺が話し始めたら壇上に上がってきてよ。ぶーたらぶーたら俺の言ってることは間違ってる。ヴェトはこういつていたって邪魔すんのよ。だからあ、ちよっとお前の爺さんと同じように後悔処刑しようと思いましたあ」

「な、なんだそりゃ…… 大体お前警察でもなんでもないだろうが！  
これは殺人罪だろう」

「いやあ？ まだ改正されてないよな？ 法律」

ジユエル黒目を上に向けて、下唇を上げつつアゴをなでて惚けたような表情をした。

エリザは満足そうに頷く。

「ええ、魔物討伐法ですね。人間に対して敵意を向けたり、窃盗の疑いがあつたり、無礼な所業をしたものは殺して良いはずです」

これは戦争時代の名残である。

戦争時代は街中に盗賊のような魔物が出没することが多く、即座にそういった無法な魔物達を討ち果たす必要があつたからだ。

しかし当然のことながら、現在の魔物は徒党を組んで人間を襲うことは無い。

だがそれでも法律が改正されていないのは、結局のところ政府の怠慢であつた。

まず国王の権限が非常に弱い。国王単独では立法権が無く議会からの承認を得なければ何も進まない。しかし所得制限がある選挙によつて、ほとんど貴族で構成された議会は、党利党略ばかりでお互いに足を引っ張つてばかりでまるで法律の制定ができていない。そんな有り様ゆえに、魔物討伐法といった人間達と関係ない法律の改正は後回しにされ続けているのだ。

もう戦後10年経っている。

それなのに、無礼打ちに近いような法律がまだ残っているのだ。

今回の大陸全土の王を決める選挙は、王の権限を強化し、混乱するばかりでまるで実務能力のない立法政府を刷新する意味合いもあった。

「くそつたれ……」

奥歯を噛みしめるヴェトを励ますようにポツコルが声を上げた。

「ヴェト！ こいつずっとずっと嘘ついてたのだ。保護貿易したらみんな貧乏になるって言ってたのだ！ ヴェトと言ってることが違

うのだ。こいつ大嘘つき野郎なのだ」

「ああん？ 俺が大嘘つき野郎だって？ こつのクソガキ」

ジユエルはつり上げたままポツコルの顔面を殴った。

「あう」

ポツコルは小さな声を上げて、鼻からだらだら血を流す。

「ふえ……ふつふえ……」

ポツコルはしゃくりあげながら、必死で涙を流さないように我慢していた。

「き、貴様！」

「動かないで」

エリザは胸の間から【拳銃】を取り出すと、ヴェトに向けた。

しかしヴェトは関係ないといった風にジユエルに走り込んでいた。撃たれてもポツコルを救い出せばいいとヴェトは思ったのだ。

その様子を見たエリザは、肩を軽くすくめた後、ポツコルの口の中にその銃口を押しこんだ。

ヴェトの足が止まった。

「お前等……お前等それでも勇者一行か！」

「魔物に人権なんてありません」

エリザはくすくす笑いながらそんなことを言う。

「ありません」

ジユエルも呼応したように口をとがらせて言う。

ヴェトはその時祖父の言葉を思い出した。

『世間の人間の言うことはまるであてにならない』

と、全くそのとおりだとヴェトは心の中で相づちをうった。

「でもねえあんたもねえ……そういう間違った考えを広めちゃだめよ。自由貿易はどんなことがあっても正しいんだから」

「はあ、なんだって？ お前達は人間だから知らないんだ。この街の魔物達が西の国からきた大量の低価格の工業製品のために苦しめられていることを！」

エリザは、待ってましたとばかりに即座にヴェトに言い返した。

「【比較優位】って知ってるかしら」

「もちろん知ってる」

「うそつくないんじゃないわ」

「知っていると云っているだろう！」

「だって知ってたら、そんなこと云うはずないもの……あー」

エリザは会場を見渡す。

皆は二人のやりとりを理解できず、押し黙ってしまっていた。

エリザはマイクをジュエルから受け取ると会場に向かって話し始めた。

「えーみなさん。私たちの話がよくわからない……という人がほとんどだと思いますので、それではちょっと経済のお勉強を試みましょう。何誰でもわかる簡単な話です」

エリザは銃口をポツコルに押し付けたまま、つらつらと語り出した。

「ちょっとこの魔王のお孫さんがね、みんなの思いこみを煽ってとんでもない嘘を教え込ませようとしています。でもそれは違うの。だって大学の教科書にきちんとこいつがということが嘘だって書いてあるんだからね」

「嘘じゃないっていつてるだろ！」

「はいはい。まずは【経済学】の基本原則である【比較優位】という概念があることをみんな知ってるかしらー？」

会場はざわめくばかりで何も反応はない。

人々はお互いに顔を見合わせるばかりであった。

彼女は満足したように余裕綽々のふりでかぶりを振ると、目を三日月のようにして、少し侮蔑的ともいえる笑いを皆に浮かべた。

「みなさんがわからないのはわかっています。【比較優位】というのはですねー、要は国々が自分の得意分野に特化した製品を作れば、全体の利益に繋がるという考え方です」

ヴェトはそんなことは知っていると思った。

「西の国は工業生産品が得意分野であります。それは多岐にわたり、工作機械、家具、ランプからはたまた冷蔵庫まで様々な工業製品を作る技術が得意です。じゃあ東の国はというと……魔物はお馬鹿さんなのでこういうのは作れないですよね？」

また会場に笑い声が響き渡った。

ヴェトは苦々しく歯がみした。

（バカヤロウ、リルルがランプ作ってるじゃねえか。こいつら人間達は自分たちは優れた種族だと思いこみ、俺等魔物は工業製品なんて作れないと思いこんでやがる。あの戦争から人間は魔物を下に見てやがるんだ）

「でも東の国にも名産品があります。それは鉱石です。石炭、硫黄、鉄などといった工業製品に不可欠な鉱石が東の国は大量に産出する場所でもあります。西の我が国では掘っても掘っても1日で掌に乗る程度のわずかの量しかとれません。さて、ここで【比較優位】という概念の登場です」

「ここで西も東も工業製品と鉱石を自分の国だけで作っていたら酷く効率が悪いと思いませんか？ 西は鉱石が手に入らないし、東は満足に工業製品を作れません。ですが、西が工業製品だけを作り、東が鉱石だけを掘る。もしそうしたらどちらも非常に効率が良くなり最終的な生産品は1つ1つの国で作るよりはるかに莫大な量になるはずです。」有り余る工業製品は全て売れ、有り余る鉱石は全て売れます”こういったように得意分野に特化すると最終的な生産物は増えてみんな喜ぶっていう理論なんですよ」

人々はその話を聞くと半分くらいが頷いて、半分くらいが首を傾げていた。

しかしだんだんとその話を理解したと思っている人間が、他の人間達に【比較優位】の説明をしだす。

その話には部分的に間違っているものも多々含まれていたが、【比較優位】のことを正しいと思うには十分であった。

ただ、この短い時間で全てを理解した……というのは早計だろう。

ほとんど解っていないのに言葉だけを鵜呑みにしたというのが正しい理解だ。

そして時間が経つ。

そうするとほとんどの人間が、宗教の信者が教祖様をあがめるような瞳でエリザを見つめだしていた。

「ま、だからね。保護関税なんか敷いちやったら、貿易を阻害するだけで最終的な生産品が減って百害あって一利なしなのよ」

エリザは笑いながらやれやれと首を振った。

「違う！」

ヴェトは腕を振り、そんなものは違うというジェスチャーをする。それを見たエリザはちつと舌打ちをした。

「何が違うのよ……」

「その理論には致命的な欠陥がいくつもある！」

「はあ？ これ大学の教科書にしっかり書いてあるのよ？ 間違ってるわけじゃないじゃない」

ヴェトは額に親指を当て、必死に祖父が話していた比較優位の欠陥を理路整然と理論で組み立てた。

頭の中でチンという音がなつて、すぐにそれは言葉になった。

「まず第一に工業製品はどの国で作ってもほとんど同じだ」

「ちよつと待つてよ。この国の工業製品の質を解って言ってるのあんた？ 昨日買ったランプなんて酷いものだったわよ。そこら中ガツタガタで持つだけでグラグラ不安定なんだもの。あんなもの西じや売り物にならないわ」

「それは工作機械の不足、それとまだこの国の工業化が始まったばかりで熟練工がいらないからだ。時間が経てば解決する問題なんだよ。だって常識的に考えてみるよ。使っている機械が一緒なら、何故魔物と人間に差が生まれるんだ？」

「魔物は人間より脳みそがヴァカの脳筋だから科学を理解できるわけじゃないじゃない。みんなそう思うわよね？」

「そうだーそうだー」

「五月蠅い！」

……

ヴェトが怒鳴ると騒いでいた群衆は押し黙った。

「ちつ……くそ、第二はだ。そんなにバカバカ大量に作っても売れないだろ！」

「え……」

エリザは口元に手を当てて意外といった顔をした。

ヴェトはその表情に驚いた。

こんなことも考えていなかったのかと。

「大体工業製品なんてのは大抵、作ったものより売れないのが普通だ。ちよつと考えればわかる。毎日毎日、家一個分はあるようなランプや椅子を作ってるんだ。最初は足りてないからいいが、最終的には余ってほとんど売れなくなるんだよ！」

「そんなもん市場がなんとかしてくれるわよ。適切になんでもしてくれるの」

「なんでそう思う？」

「神様の手が市場を制御してるから」

「は？」

「だから神様」

ヴェトはあきれかえってもものもいえなかった。理論で返すのかと思つたら神様つてのは……本当にこいつは学者なのか。

「あんた間違ってるわよ。だって学界のみんながそういつてたし」

こいつは……ひどい。

学者共の言うことを頭から暗記してわかった気になってやがる。

【本に書いてあることを全て信じていたら、それは本を読んでいないことと同じ】

って有名なことわざを知らないのか。

「あのなあ、そんなこと続けていたら、最終的に東の国はずつと貧乏で、また飢饉になっちまうだろ。鉾石なんか売っても大した利益にならないんだから」

「ハイハイ、じゃあみんなにその子供みたいな理論を話して納得させたらいいじゃない。そうしたら、この子を解放してあげてもいいわよ。そうね……話し終わって会場で多数決を取りましょう。私とあなたとどちらを信じるか。あなたが勝ったらこの子は解放、私が勝ったらこの子を殺すってことで」

「いいだろう」

ヴェトが逡巡しなかったのは、自分の言葉に絶対の自信を持っていたからだ。

こいつの話は矛盾だらけだ。

ヴェトは完全に論破したと思っていた。

ポツコルに向かってヴェトは頷いた。

「すぐ助け出してやるからな」

それを見たポツコルは同じように頷いた。

例え自分の命が危険にさらされてもポツコルがヴェトを疑うことなどない。

ヴェトとポツコルの仲はそれほど深かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8131q/>

---

第一回大魔王選出選挙

2011年4月21日13時40分発行